第二章　浮舟の物語　浮舟の小野山荘での生活

［第一段　僧都、小野山荘へ下山］

うちはへかく扱ふほどに(妹尼は女を引き続き介抱する内に)、*四、五月も過ぎぬ(四月、五月と過ぎました)。　＊「し、ごぐぁちもすぎぬ」は注に＜浮舟の入水未遂事件は三月末、それから小野で二月を経過した。季節は夏、猛暑のころとなる。＞とある。現代語では＜四、五ヶ月＞という単位期間の言い方はするが、「四、五月」という固有名の省略はしない。四月、五月だ。すごく違和感がある。

いとわびしうかひなきことを思ひわびて(女の状態の一向に改善の兆しが見えないのを妹尼は、とても案じて介抱の甲斐が無いことに困り果てて)、僧都の御もとに(横川に居る兄の僧都のところへ)、

「なほ下りたまへ(ぜひ様子を見に来てください)。この人、助けたまへ(この人を助けてください)。さすがに今日までもあるは(元気にならないにしても今なお生きているということは)、死ぬまじかりける人を(死ぬる定めではない人なのでしょうから)、憑きしみ領じたるものの(取り憑いている物の怪が)、去らぬにこそあめれ(去らない所為に違いありません)。*あが仏(どうかあなた様)、*京に出でたまはばこそはあらめ(京にお出になるなら御籠りに障るでしょうが)、ここまではあへなむ(此処までででしたら障りますまい)」　＊「あがほとけ」は注に＜僧都に対して懇願した呼びかけ。＞とある。是は分かり難かった。他人なら偉僧にこう呼び掛けることもありそうだが、実兄に対しては冗談や愚弄に聞こえそうで言いそうもない気がしたからだ。が、困り果てたら言うのかも。　＊「きゃうにいでたまはば」の文意も＜御籠りに障る＞という事情に気付かなかった。大体、山篭りして修行する、ということに厳しそうな雰囲気は感じるし、克自の観念はありそうな気もするが、私にはその真意ないし真価は分からない。

など、いみじきことを書き続けて(など切実な事情を書き連ねて)、奉りたまへれば(御文書を差し上げなされば)、

「いとあやしきことかな(確かに不思議だ)。かくまでもありける人の命を(此処まで生き延びている人の命を)、やがてとり捨ててましかば(そのまま見捨てられようか)。さるべき契りありてこそは(関わるべき縁があったればこそ)、我しも見つけけめ(私をしてあの女に御仏は会わせ給うたのだろう)。試みに助け果てむかし(出きるだけのことはしてみよう)。それに止まらずは(それで救えなければ)、業尽きにけりと思はむ(私の修行が足りない知るしと知るべきなのだろう)」

とて、下りたまひけり(と考えて、僧都は小野へ下りていらっしゃいました)。

よろこび拝みて(妹尼は僧都を喜んで拝み見て)、月ごろのありさまを語る(今までの様子を話します)。

「かく久しうわづらふ人は(このように長患いしている人は)、むつかしきこと、おのづからあるべきを(どうしても見苦しくなるものですが)、いささか衰へず(この人は少しも貧相にならず)、いときよげに(とても整然として)、ねぢけたるところなくのみものしたまひて(苦しそうな表情もなくいらっしゃって)、限りと見えながらも(元気は無いものの)、かくて生きたるわざなりけり(こうして生き延びているのです)」

など(と妹尼は)、おほなおほな泣く泣くのたまへば(その逐一を泣く泣く仰るので)、

「見つけしより(見付けた時から)、珍かなる人のみありさまかな(目を引く美しさではあった)。いで(どれ)」

とて(と僧都は)、さしのぞきて見たまひて(女の様子を物越しに覗いて御覧になって)、

「げに(確かに)、いと警策なりける人の*御容面かな(本当に驚くほど美しいこの人の 御顔立ちだ)。功徳の報いにこそ(前世での善行が報われて)、かかる容貌にも生ひ出でたまひけめ(こういう器量に生まれ付きなさったのだろう)。いかなる違ひめにて(現世ではどういう行き違いがあって)、損はれたまひけむ(こうした不幸な目に遭っていらっしゃるのだろう)。もし、さにや(何か、是が其うだろうかと)、と聞き合はせらるることもなしや(思い当たるような噂を聞いていませんか)」　＊「御容面」は「おおんようめい」とローマ字読みがある。「ようめい」は＜「ようめん」の音便。顔かたち。＞と古語辞典にある。

と問ひたまふ(と妹尼にお尋ねなさいます)。

「さらに聞こゆることもなし(何処の誰とも聞いていません)。*何か(でも、何処の誰であろうと)、初瀬の観音の賜へる人なり(この人は初瀬の観音様が亡き娘の代わりに私に授けて下さった人なのです)」　＊「なにか」は、疑問の＜なぜ、どうして＞という語用ではなく、反語の＜いや、しかし、でも＞という語用。

とのたまへば(と妹尼が仰ると)、

「何か(しかし、それなら尚更)。それ縁に従ひてこそ導きたまはめ(縁があってこそのお導きなのだから)。種なきことは*いかでか(娘と言っても、この人の事情が分からなくては育てようがないだろう)」　＊「いかでか」は注に＜反語表現。下に「導きたまはむ」などの語句が省略。＞とある。が、この主語は仏ではなく、女を娘と見做したい妹尼が主語で、省語は＜育まむ＞あたりになるかと思う。

など、のたまふが(と僧都は仰るものの)、*あやしがりたまひて(妹尼が故八宮や大将とどういう縁があるのかを、不思議にお思いになって)、修法始めたり(破魔の呪文を唱え始めました)。　＊「あやしがる」と言っても、僧都は宇治の村人の話からして、この女が「故八の宮の御女、右大将殿の通ひたまひし」(一章六段)可能性を強く疑っているはずで、全く何の手がかりも無い、とい

うわけでもなさそうだ。ただ、どういう縁があるのかは知らないし、奇妙な話ではあるので、自動的な展開を待っていたが、もう一歩踏み込んで関わらなければならないと考えた、みたいなことだろうか。

［第二段　もののけ出現］

「朝廷の召しにだに従はず（帝のお呼び出しにも応じ申さず）、深く籠もりたる山を出でたまひて（深く籠もっていた山を下りなさって）、すぞろにかかる人のためになむ行ひ騒ぎたまふと（気まぐれでこういう素性の知れない人のために読経を熱心にあげていなさると）、ものの聞こえあらむ（噂になっては）、いと聞きにくかるべし（とても不都合だろう）」と思し（と妹尼はお思いになって）、弟子どもも言ひて（弟子どももそう意見して）、「人に聞かせじ（人に聞かせまい）」と隠す（と僧都の修法を隠します）。

僧都（しかし僧都は）、

「いで、あなかま。大徳たち（いや、そう構えるな、法師たちよ）。われ*無慚の法師にて（私は罪深い僧侶にて）、忌むことの中に、破る*戒は多からめど（示された戒律の中に背いたことは多くあるだろうが）、女の筋につけて、まだ誹りとらず（女の事では未だ非難を受けず）、過つことなし（間違いを犯したことは無い）。六十に余りて（それが、六十歳を過ぎて）、今さらに人のもどき負はむは（今さらに女のことで噂を立てられるとしたら）、*さるべきにこそはあらめ（それこそ本望だ）」　＊「無慚（むざん）」は古語辞典に＜仏語。罪を犯して恥としないでいること。＞とある。ざっと＜不徳の至らない者＞くらいだろうか。　＊「戒」は＜いましめ＞ではなく「かい」と読みがある。明文化された＜戒律＞のことだろうか。　＊「さるべきにこそはあらめ」は＜それが私の天命というものだ＞という理屈だろうが、是は間違いのあるはずもない、という余裕を放いた冗句だから＜それこそ本望だ＞くらいの言い方なのだろう。

とのたまへば（と仰るので）、

「よからぬ人の（意地の悪い者が）、ものを便なく言ひなしはべる時には（物をねじ曲げて言い触らせば、女に近付くことは事実なのですから）、仏法の瑕となりはべることなり（教えに傷が付きましょう）」

と、心よからず思ひて言ふ（と弟子たちは不満そうに思い言います）。

「この修法のほどにしるし見えずは（今回の私の魔封じで効果が無かったら）」　*注に＜僧都の詞。『完訳』は「二度と加持祈祷はすまい、ぐらいの非常の決意で修法にあたる」と注す。＞とある。下文に「いみじきことどもを誓ひたまひて」とあるので、確かに＜非常の決意＞ではありそうだが、省語は「二度と加持祈祷はすまい」ではなく＜修行の効ひ無し＞くらいなのではないか。だから、命がけで臨む、という不退転の決意表明になるかと思う。尤も、表明と言っても、内心文なので自分への誓いだが。

と、いみじきことどもを*誓ひたまひて(と僧都は不退転の覚悟を決めなさって)、夜一夜加持したまへる暁に(一晩中呪文を唱えなさった明け方に)、人に駆り移して(取り憑いていた浮遊霊を女から他の人の身体に追い出して)、「何やうのもの(どういう魔物が)、かく人を惑はしたるぞ(このように人を苦しめたのか)」と、ありさまばかり言はせまほしうて(と事情だけは喋らせたいと)、弟子の阿闍梨、とりどりに加持したまふ(弟子の阿闍梨と交替に休み無く魔物を懲らす呪文を唱え続けなさいます)。　＊「誓ふ」は＜約束する＞でもあるが＜内心固く決意する＞でもあって、上文は発言ではなく内心文だろうから、此処では後者の語用だ。

月ごろ(この数か月間)、いささかも現はれざりつるもののけ(少しも姿を見せなかった物の怪は)、調ぜられて(僧都らの修法に制圧されて)、

「おのれは、ここまで参うで来て(自分は此処の比叡山の僧都のところに参り来るようなことになって)、かく調ぜられたてまつるべき身にもあらず(このように制圧され申すはずの者ではなかった)。昔は行ひせし法師の(生前は修行に励んだ法師で)、いささかなる世に*恨みをとどめて(わずかな現世未練を女への執着で断ち切れなかった所為で)、漂ひありきしほどに(成仏できずに中空を浮遊していた時に)、*よき女のあまた住みたまひし所に住みつきて(物憂げで取り憑き易い女が多く住んでいらっしゃった宇治の屋敷に棲み着いて)、*かたへは失ひてしに(一人はあの世に導いたが)、この人は、*心と世を恨みたまひて(この人は自分から人間関係に悩みなさって)、我いかで死なむ、と言ふことを(死んでしまいたいということを)、夜昼のたまひしにたよりを得て(毎日仰っていたのに付け込んで)、いと暗き夜(月も無い月末の暗い夜に)、独りものしたまひしを取りてしなり(独りでいらっしゃったところを取り憑きました)。されど(けれども)、*観音とざまかうざまにはぐくみたまひければ(初瀬の観音が何かと守りなさったので)、この僧都に負けたてまつりぬ(この僧都に負けてしまい申した)。今は、まかりなむ(もう退散し申す)」　＊「うらみをとどめて」は注に＜『完訳』は「女人への執着でもあったか」と注す。＞とある。下文に「よき女のあまた住みたまひし所に住みつきて」とあるので、女色未練で間違いないと明示補語する。　＊「よき女のあまた住みたまひし所」は注に＜宇治の八宮邸。＞とある。「宇治」は宇治院で見付けた物の怪なので明示できる客観性があるが、「八宮邸」は村人の話はあったものの、その八宮や宮邸の事情を僧都は良く知らないはずなので明示はできない。また、此処の「よきをんな」の「良し」だが、これは＜美しい＞とか＜高貴だ＞ということは確かに乗り移る張り合いがありそうだが、それよりむしろ、霊にとって＜都合が良い＝取り憑き易い＝物憂げだ＞と読んで置く。　＊「かたへはうしなひてし」は注に＜『集成』は「大君のこと。大君に物の怪のとりついた形跡はない。この巻で、事情をこの物の怪の言ったようなことに作りかえたのである」と注す。＞とある。「作りかえた」のかもしれないし、後時代の加筆かもしれないし、元々この続編自体が後時代の加筆かもしれないし、初めからの構想だったのかもしれないし、初めから実情ルポと思い付きで続いてきた話なのかもしれない。この物語は長い年月を生き抜いて来ているので、今さらは大古典になっているが、元々が肩の力を抜いて読むべき世話話だ。が、長く生き抜いて来た秘訣はあって、それは全部が自分の言葉で本音を語っているように見えて、多くの読者が共感できるところのある話だからなのだろう。それは個で語れる小説ならではの特性かもしれないが、世を論じる大説にあっても、個の心に響かない言葉は、そも言葉の体を成していない。　＊「心と」は成語で＜自分の気持ちで、自ら＞という言い方らしい。「我が心として」の略だろうか。　＊「くゎんおん」は注に＜長谷寺の観

音。＞とある。常陸姫の母君が初瀬観音を信奉していたことと、この母子尼が初瀬詣でをしたこととが此処で繋がる、ということだろうか。当時の、特に女方の、初瀬観音人気が偲ばれるような気もするが、この構想は当初かららしい。

とののしる(と喚きます)。

「かく言ふは、何ぞ(そう言うお前は誰だ)」

と問へば(と僧都は訊いたが)、憑きたる人(物の怪を仮に憑依させた者が)、ものはかなきけにや(修行が足りなかった所為か)、はかばかしうも言はず(其処まですらすら答えさせるほど手懐けられませんでした)。

［第三段　浮舟、意識を回復］

正身の心地はさはやかに(浮遊霊が抜けた女本人は気分がすっきりして)、いささかものおぼえて見回したれば(少し意識が戻って辺りを見回すと)、一人見し人の顔はなくて(誰一人と見知った人の顔は無くて)、皆、老法師(老法師ばかりで)、ゆがみ衰へたる者のみ多かれば(シワだらけの見映えの劣る者が多かったので)、知らぬ国に来にける心地して、いと悲し(異国に来たような気がしてとても不安です)。

ありし世のこと思ひ出づれど(以前の事を思い出しても)、住みけむ所(住んでいた所や)、誰れと言ひし人とだに(自分が誰なのかも)、たしかにはかばかしうもおぼえず(はっきり分かりません)。ただ(それでも)、

「我は、限りとて身を投げし人ぞかし(私はこの世を見限って身を投げた者だ)。いづくに来にたるにか(どうして私は今此処にこうして居るのだろう)」とせめて思ひ出づれば(と強いて考えてみると)、

「いといみじと、ものを思ひ嘆きて(とても辛いと世を儚んで)、皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに(皆が寝静まってから妻戸を開けて外へ出たが)、風は烈しう、川波も荒う聞こえしを(風は激しく川波も荒れて聞こえたので)、独りもの恐ろしかりしかば(独りで怖くなって)、来し方行く先もおぼえで(後先も分からずに)、簀子の端に足をさし下ろしながら(縁側の端から足を地面に着けたものの)、

行くべき方も惑はれて(行く先の当てもなく)、帰り入らむも*中空にて(家に戻るのも虚しく思えて)、心強くこの世に亡せなむと思ひ立ちしを(思いきってこの世を去ろうと決心したが)、『をこがましうて人に見つけられむよりは(恥ずかしい死体を見つけられるよりは)、鬼も何も食ひ失へ(鬼でも何でも私を食い消してくれ)』と言ひつつ(と呟きながら)、つくづくと居たりしを(じっとして居たら)、　*「なかぞら」は＜中途半端＞という語用が多いようだが、此処では＜虚しい＞気分なのだろう。

*いときよげなる男の寄り来て(とても綺麗な男が近付いてきて)、『いざ、たまへ(さあ、おいでなさい)。おのがもとへ(私の所へ)』と言ひて、抱く心地のせしを(と言って私を抱く気がしたが)、宮と聞こえし人のしたまふ(宮様という人がなさっている)、とおぼえしほどより(と思った時から後は)、心地惑ひにけるなめり(意識が薄れてしまったらしい)。　*「いときよげなる男」は、常陸姫はこの男を「宮と聞こえし人」と思ったらしい。が、それが実は浮遊霊だった、ということなのだろう。注には＜『集成』は「「宮と聞こえし人」という言い方は、浮舟の記憶がまだ完全にもどっていないことを示す」。『完訳』は「浮舟には、匂宮が宇治川を渡って連れ出した時の、官能的な陶酔感が鮮やかに残っている。誘う美男を幻視するゆえん」と注す。＞とある。常陸姫は三の宮に心を奪われていたが、大将への義理から三の宮に走れなかった。そして、自分の罪深さに入水を思い立った、ということは浮舟巻で明示されていた。三の宮の罪深さや常陸姫の業の強さや薫殿の取り澄ましが絡み合った様相で、混み入ってはいても有り勝ちな実相にも思え、やはり入水を思い立つ常陸姫の短絡さは貴族の図太さに欠ける生い立ちの悲劇を思わせる。ただ、この辺の設定については、私はどうも苦手な話運びで、芝居としての各場面鑑賞は心掛けているが、然して面白く読んでいない。ほぼ、古典への資料的興味で読んでいるので、遅読を楽しむの体だ。

知らぬ所に据ゑ置きて(知らない所に私を置いて)、この男は消え失せぬ(この男は消え失せた)、と見しを(と思っていたが)、*つひにかく本意のこともせずなりぬる(其処を誰かに見つかって、とうとう入水は出来ずに終わった)、と思ひつつ、いみじう泣く(と思って、ひどく泣いている)、と思ひしほどに(とまでは思い出したが)、その後のことは絶えて(その後の事は一切)、いかにもいかにもおぼえず(何も思い出せません)。　*「つひにかく」とは、宇治院の裏手で法師たちに見つけられて入水できずに終わった、という意味なのだろう。「かく」は＜あなた方が事情をご存知の通り＞みたいな言い方だろうか。分かり難いので明示補語する。

人の言ふを聞けば(此処の尼女房たちの話を聞くと)、多くの日ごろも経にけり(それから何日も過ぎたらしい)。いかに憂きさまを(どんな醜態を)、知らぬ人に扱はれ見えつらむ(他人様に御世話されて来たのか)、と恥づかしう(と恥ずかしく)、つひにかくて生き返りぬるか(とうとうこうして生き返ってしまったのか)」

と思ふも口惜しければ(と思うと無念で)、いみじうおぼえて(とても悲しく)、なかなか、沈みたまひつる日ごろは(却って憑依されていらっしゃった日々は)、うつし心もなきさまにて(呆然としたままに)、ものいささか参る事もありつるを(少しは食事を摂ることもあったが)、つゆばかりの湯をだに参らず(今は少しの薬湯でさえお飲みになりません)。

［第四段　浮舟、五戒を受く］

「いかなれば、かく頼もしげなくのみはおはするぞ(どうして、そんな頼りなさそうにばかりしていらっしゃるのですか)。うちはへぬるみなどしたまへることは冷めたまひて(ずっと熱っぽくいらっしゃったのも冷めなさって)、さはやかに見えたまへば(良くなったようにお見えなので)、うれしう思ひきこゆるを(嬉しく思っておりますものを)」

と（と妹尼は）、泣く泣く、たゆむ折なく添ひゐて扱ひきこえたまふ（泣く泣く弛まず付き添って女を御世話申しなさいます）。ある人びとも（尼女房たちも）、あたらしき御さま容貌を見れば（捨てるに惜しい彼女の上品な人柄と容姿を見れば）、心を尽くしてぞ惜しみまもりける（誠心誠意看病していました）。

心にはなほ（女本人は今もなお）、「いかで死なむ（死にたい）」とぞ思ひわたりたまへど（と思い続けていらっしゃったが）、*さばかりにて（天命によって）、生き止まりたる人の命なれば（まだ生きる定めの命なので）、いと執念くて（とても現世執着が強くて）、やうやう頭もたげたまへば（次第に枕も離れて）、もの参りなどしたまふにぞ（食事も摂りなさったので）、*なかなか面痩せもていく（腫れ太りしていた病臥の時よりも、むしろ顔が痩せて引き締まって来ました）。　*「さばかり」は＜そうなる事が当然＝天命＞。　*「なかなかおもやせもていく」は注に＜『集成』は「かえって顔がほっそりなってゆく。回復期の人の様子がよく写されている」と注す。＞とある。

いつしかとうれしう思ひきこゆるに（彼女は直に本復しそうだと妹尼は嬉しく思い申していたが）、

「尼になしたまひてよ（私を尼にしてください）。さてのみなむ生くやうもあるべき（それ以外に生きる道はありません）」

とのたまへば（と女本人が仰るので）、

「いとほしげなる御さまを（現世冥利を満喫できそうな、出家するには惜しいあなた様を）。いかでか、さはなしたてまつらむ（どうしてそのように仕申せましょう）」

とて（と妹尼は言って）、*ただ頂ばかりを削ぎ（ただ形ばかりに少し髪を切り）、五戒ばかりを受けさせたてまつる（在家入信の五戒の儀式を受けさせ申し上げます）。心もとなけれど（女本人は是では不満だったが）、もとより*おれおれしき人の心にて（もともと主張しない人なので）、えさかしく強ひてものたまはず（強く説得はなさいません）。　*「ただいただきばかりをそぎ〜」は注に＜『集成』は「正式の尼は髪を肩を過ぎるあたりまでに切る」。『完訳』は「延命のためで、正式の出家ではない」。「五戒」は在家の人が受ける戒律。殺生・偸盗・邪淫・妄語・飲酒。＞とある。　*「おれおれし」は、古語辞典の項目の並びから類推すると、「愚る（おる、怠る・劣る）」という語がラ行下二段活用動詞にあるらしく、その形容詞化で＜愚かしい、受身だ＞という語用になるらしい。現代語に繋がっていないように見えるので手応えが無い語だ。

僧都は、「今は、かばかりにて、いたはり止めたてまつりたまへ」と言ひ置きて、登りたまひぬ（僧都は「今は是くらいにして、養生させ申しなさい」と言い置いて山を登って横川に帰りなさいました）。

［第五段　浮舟、素性を隠す］

「夢のやうなる人を見たてまつるかな(夢に見たような人を御世話申していることです)」と尼君は喜びて(と妹尼は喜んで)、せめて起こし据ゑつつ(彼女を頻りに起こして座らせて)、御髪手づから削りたまふ(ご自分で彼女の髪を梳いて遣りなさいます)。

*さばかりあさましう(病臥中はすっかり手入れせず)、ひき結ひてうちやりたりつれど(結び束ねたままだったが)、いたうも乱れず(然程は痛まず)、解き果てたれば(良く梳いてやると)、つやつやとけうらなり(彼女の髪はつやつやと綺麗でした)。　*「さばかりあさましう」は＜大変にひどく＞みたいな言い方だろうか。「さばかり」の「さ」は、代名詞の＜それ、其、左＞ではなく、属性として当然にあるべき形態を想定していう＜しかり、しかるべし、然＞で、「さばかり」はほぼ＜然程＞だが、如何にも曖昧語だ。注には＜病臥中は髪を元結で束ねておき、櫛けずることもしない。＞とある。そういう生活様式を常識としている人たちにとっても、この文の「さばかり」という言い方は分かり難いんじゃないかと思うが、どうなんだろう。常識の無い私は、この注釈無しには全く意味不明の文だ。

*一年足らぬ九十九髪多かる所にて(白髪老人の多いこの小野尼庵で)、目もあやに(黒髪の彼女は目にも奇に)、いみじき天人の(いみじきてんにんの、美しい天女が)天降れるを(あまくだれるを、空から舞い降りたのを)見たらむやうに思ふも(見ているかのように思うのも)、危ふき心地すれど(いつ消えるかと不安だが)、　*「ひととせたらぬつくもがみ」は、漢字の「百」から「一」を引くと「白」という字になる、という文字遊びで＜白髪＝老人＞をいう言い方とのこと。だが、「九十九」を「つくも」と読む理由は諸説あって、決定番が無いらしい。それでも一番尤もらしいのは、「百(もの)」に次ぐから＜つぐもも→つくも＞という説だろうか。というのも、「百」が和語で「もも」なのは、「もも」が＜大量、多くの＞を言う語だかららしいし、係助詞「も」は同類他物を示すし、副詞「もっと」は＜いっそう、さらに多く＞という物量意の語感だし、英語の'more'も「も」音だし、「も」が大量概念なのは、まぁ腑に落ちる。ところで、注には＜『源氏釈』は「百年に一年たらぬつくも髪我を恋ふらし面影に見ゆ」(伊勢物語）を指摘。＞とある。この引歌の歌筋は＜白髪の老婆が私を恋しがっているらしい、面影に見えたから＞で、人を恋しく思うと＜思われた人の頭に懸想人の面影が浮かぶ＞という伝承ないし方便が懸想人の期待や恋愛の親神秘性から一定の説得力を以て広く信じられていた、ということに基づく詠み方になっているらしい。が、伊勢物語六十三段の話では、実は懸想人が側に居ることを知った上で在原業平が是を詠んで聞かせる、という設定になっていて、好色な老女をずいぶん茶化した趣きのようだ。大体が、白髪の老婆を言うためだけに「ももとせに、ひととせたらぬ、つくもがみ」と三節十七文字を費やすというバカらしさは、そのオフザケ自体を楽しんでいる以外の何ものでもないだろう。とはいうものの、伊勢物語六十三段は老婆が遊び男の手配相談を息子にするという、まぁ無いでも無い話かもしれないが、奇談めいてもいて、私にはどうも掴み所が無い。だから、其処で詠まれた歌の真意も、実は分からない。ただ、同話にもう一句、その老婆が男を誘うのだろう歌として、「**さむしろに衣片敷き**今宵もや恋しき人にあはでのみ寝む」という歌が採用されていて、この歌は宇治姉君の枕に敷かれた「**さむしろに衣片敷き**今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」という古今集 689 歌の同類歌であることが妙に気になる。作者には何か意図か思い付きがありそうだが、今の私には分からない。

「などか、いと心憂く(どうして、そう元気無く)、かばかりいみじく思ひきこゆるに(これほど親身に御世話申すのに)、*御心を立てては見えたまふ(我を張っていらっしゃるのですか)。いづくに誰れと聞こえし人の(あなたは何処の誰という人で)、さる所にはいかでお

はせしぞ(あの宇治院にいらっしゃった理由は何なのですか)」　＊「御心」は「みこころ」と読みがある。「心を立つ」は＜志を立てる。我を張る。＞と古語辞典にある。

と(と妹尼が)、せめて問ふを(頻りに訊くのを)、いと*恥づかしと思ひて(彼女は何も答えないのを、とても申し訳なく思って)、　＊「恥づかし」は＜きまりが悪い。気が引ける。＞と古語辞典にある。しかし、本当に記憶が無くて答えられないのなら、質問に＜困る＞のであって＜引け目に思う。済まなく思う。＞というのは少し変だ。と思ったら、下に「いとらうたげに言ひなして」とあって、常陸姫は記憶が戻っているのを隠しているらしく、それでこういう言い方になるようだ。が、それならそれで説明してもらわなければ、読者が勝手に判断できる事がらではないのだから不親切だ。

「あやしかりしほどに(患っている内に)、皆忘れたるにやあらむ(皆忘れたようで)、ありけむさまなどもさらにおぼえはべらず(以前の事は全く分かりません)。ただ、ほのかに思ひ出づることとては(ただ微かに思い出すのは)、ただ、いかでこの世にあらじと思ひつつ(とにかく、何としてもこの世に生きていられないと思って)、夕暮ごとに端近くて眺めしほどに(夕暮れになる度に縁側近くで庭を眺めていた時に)、前近く大きなる木のありし下より(近くの大木の蔭から)、人の出で来て(誰かが出て来て)、率て行く心地なむせし(私を連れて行った気がします)。それより他のことは(それ以外は)、我ながら(自分の事ながら)、誰れともえ思ひ出でられはべらず(誰とも思い出せません)」

と、*いとらうたげに言ひなして(と、然も不安気な言い方をして)、　*注に＜『集成』は「いかにも無邪気そうな口ぶりで言って。記憶がはっきりしないという嘘を見破られまいとする用意」。『完訳』は「実は浮舟の記憶はもとに戻っている」と注す。＞とある。が、此処までの本文に覚醒の記述は無く、非常に分かり難い文になっている。

「世の中に、なほありけりと(まだ私が生きていると)、いかで人に知られじ(絶対に人に知られたくないのです)。聞きつくる人もあらば(私がこうして居ることを、聞きつける人がいたら)、いといみじくこそ(本当に困ります)」

とて泣いたまふ(と言って泣きなさいます)。あまり問ふをば(あまり問い詰めると)、苦しと思したれば(彼女が辛くお思いのようなので)、え問はず(妹尼はそれ以上は訊けません)。かぐや姫を見つけたりけむ竹取の翁よりも、珍しき心地するに(かぐや姫を見付けた竹取の翁よりも、妹尼は彼女を愛しい気がするので)、「いかなるものの隙に消え失せむとすらむ(どんな隙に消え失せてしまうか分からない)」と、静心なくぞ思しける(と不安にお思いなのでした)。

［第六段　小野山荘の風情］

この主人も(このあるじも、この小野尼庵の主人の母尼君も)あてなる人なりけり(高貴な家がらの人なのでした)。娘の尼君は(妹尼君は)、上達部の北の方にてありけるが(政府高官の奥方だったが)、その人亡くなりたまひてのち(夫が亡くなった後は)、娘ただ一人をいみ

じくかしづきて(一人娘を大事に育てて)、よき君達を婿にして思ひ扱ひけるを(立派な貴公子を婿に迎えて世話をしていたが)、その娘の君の亡くなりにければ(その娘である姫君が亡くなってしまったので)、心憂し(辛い)、いみじ(悲しい)、と思ひ入りて(と思い詰めて)、形をも変へ(出家して尼僧姿になり)、かかる山里には住み始めたりけるなり(この小野の山里に住み始めたのでした)。

「世とともに恋ひわたる人の形見にも(年月が経つほど恋しく思い続ける亡き娘の身代わりに)、思ひよそへつべからむ人をだに見出でてしがな(見立てられるような人を見つけ出したい)」、つれづれも心細きままに思ひ嘆きけるを(と、当てもなく心細いままに思い嘆いていた所に)、かく、おぼえぬ人の、容貌けはひもまさりざまなるを得たれば(このように、思いがけない人で、容姿や物腰も優れている人を得たので)、うつつのこととともおぼえず(現実の事とも思えず)、あやしき心地しながら(不思議な気持ちながら)、うれしと思ふ(嬉しく思うのです)。ねびにたれど(妹尼は初老だが)、いときよげによしありて(とても美しく教養高く)、ありさまもあてはかなり(仕草も上品です)。

*昔の山里よりは(この小野尼庵は、常陸姫が思い出した宇治山荘よりは)、*水の音もなごやかなり(水の音も穏やかです)。造りざま(庵の造り方や)、ゆゑある所(風情ある場所柄)、木立おもしろく(木立は立派で)、前栽もをかしく(植え込みの前庭も綺麗で)、ゆゑを尽くしたり(手が込んでいます)。　＊「むかしのやまざと」とは＜宇治山荘＞のことらしいが、こういう言い方をするということは「昔」を思い出している証左なのだろう。此処に常陸姫覚醒の明示を見る、ということかもしれない。が、だとしたら、やはり非常に事情が分かり難い筆致だ。　＊「みづのおと」は琵琶湖ではなく川の音だろうが、小野神社に近い和邇川(わにがわ)だろうか。

*秋になりゆけば(七月に入って秋になると)、空のけしきもあはれなり(空模様も感傷的です)。*門田の稲刈るとて(門前の田んぼの稲を刈り取るということで)、所につけたるものまねびしつつ(その土地の農民の格好を真似て)、若き女どもは(若い尼女房たちは)、歌うたひ興じあへり(歌をうたってはしゃいでいました)。*引板ひき鳴らす音もをかしく(鳥追いの鳴子板を鳴らす音も面白く)、*見し東路のことなども思ひ出でられて(常陸姫は昔見た東路の事なども思い出されて、懐かしく‥)。　＊「あきになりゆけば」は注に＜暦は七月、初秋、物思う季節となる。＞とある。　＊「門田(かどた)」は＜門前の田＞と古語辞典にある。　＊「引板(ひた・ひいた・ひきいた)」は＜鳥追いの鳴子板＞とのこと。　＊「見し東路のことなども思ひ出でられて」は注に＜『完訳』は「昔暮した常陸国。傷心の今になって、幼時が懐かしまれる趣」と注す。下文に続かず、余情を残して文が切れる。＞とある。完全に記憶が戻ったことの明示でもある。

*かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは(また読者諸兄に於かれてはご案内の、かの夕霧の母御息所が病気療養なさっていた小野山荘よりは)、今すこし入りて(この尼庵は少し奥まって)、山に片かけたる家なれば(山の斜面に建てた家だったので)、松蔭茂く(松林が茂って)、風の音もいと心細きに(風の音もとても寂しげで)、つれづれに行ひをのみしつつ(日課としては念仏行ばかりして)、いつとなくしめやかなり(いつもしっとりと静まっていました)。

*「かのゆふぎりのみやすどころのおはせしやまざと」は注に＜『集成』は「夕霧の巻で亡くなったので、こう呼んだもの。落葉の宮の母、一条の御息所」と注す。『弄花抄』は「双紙の詞なるへし浮舟の事を云ことはにはつゝかす」と指摘。＞とある。朱雀院の一条御息所が病気療養で小野山荘に移り住んだのは、源氏大臣が29歳の大将時代の8月あたりだった。今から25年ほど前の話だ。が、どうせ昔話の体で此処の話も語っているのだろうから、ちょっと前の同じような情緒、として引き合いに出すのも特段に唐突でも無いのかもしれない。また、あるいは、後世の加筆かもしれない。ただ確かに、この引き合いは常陸姫が懐古する事柄では決して無いし、語り地文にしてみても、かつて一条御息所を＜夕霧の御息所＞とは呼称していなかったと思うので、やはり少し違和感はある。が、何れにしても、本文にこうある、ものとして言い換える他は無い。

［第七段　浮舟、手習して述懐］

尼君ぞ(妹尼君は)、月など明き夜は(月の明るい夜に)、*琴など弾きたまふ(七弦古琴をお弾きになります)。少将の尼君などいふ人は(女房の少将の尼君という人が)、琵琶弾きなどしつつ遊ぶ(琵琶を伴奏しています)。　*「琴」は「きん」と読みがある。七弦古琴だろうが、女手は珍しいのではないか。このことから、妹尼は相当に音楽に造詣が深いと知るべきなのかもしれない。

「かかるわざはしたまふや(あなたもお弾きなさいな)。つれづれなるに(気晴らしになりますよ)」

など言ふ(と妹尼は常陸姫に言います)。昔も(昔も地方を転々として)、*あやしかりける身にて(貴族の作法を十分に身につけられない暮らしだったので)、「心のどかに(落ち着いて)、さやうのことすべきほどもなかりしかば(管弦を習える機会もなくて)、いささかをかしきさまならずも生ひ出でにけるかな(少しも風雅のたしなみも無く育ったものだ)」と、かくさだ過ぎにける人の(と、このような老年の人たちが)、心をやるめる折々につけては(風雅に遊ぶ時に際しては)、思ひ出づるを(劣りを覚えるので)、「あさましくものはかなかりける(教養の無い者は底が浅い)」と、我ながら口惜しければ(と常陸姫は我ながら悔しくて)、手習に(せめて歌詠みでもと、手習い事にこう書き記します)、　*「あやし」は＜通常ではない＝変だ＞という語感らしく、この「変だ」は＜貴族として普通じゃない→東下りで都を離れていた＞ということらしい。与謝野訳文に＜昔も母の行く国々へつれまわられていて＞とある。

「身を投げし涙の川の早き瀬を、しがらみかけて誰れか止めし」(和歌53―01)

「堰き止めた 涙はいっそ 溢れ出る」(意訳53―01)

*「たれかとどめし」は＜止めたのは誰だ＝助けられて迷惑だ＞と文句を言っているように聞こえるが、「しがらむ」は他動詞なら＜からませる＞だが、自動詞なら＜からむ＝関わる＞なので、自分が生き延びたのは＜誰が助けたにせよ＞そういう運命なのか、と受け止めたのかもしれない。

思ひの外に心憂ければ(こう書いてみてから、自分の運命が改めて悲しく)、行く末もうしろめたく(将来に希望も持てず)、疎ましきまで思ひやらる(厭なものに思われます)。

月の明かき夜な夜な(八月中旬の月の明るい毎晩に)、老い人どもは艶に歌詠み(老尼たちは優雅に和歌を詠み)、いにしへ思ひ出でつつ(華やかな昔の暮らしを思い出して)、さまざま物語などするに(いろいろな話をしていたが)、いらふべきかたもなければ(常陸姫はその話の中に入って受け答えすることなど出来ようもなかったので)、つくづくとうち眺めて(やるせなく庭を眺め見ては、こう詠みます)、

「我かくて憂き世の中にめぐるとも、誰れかは知らむ月の都に」(和歌 53-02)

「相手だか 自分の何方か 浮いている」(意訳 53-02)

*注に＜浮舟の独詠歌。「めぐる」「月」縁語。「月の都」はかぐや姫をも連想させる。＞とある。自分一人が異星人の気分、ということは誰でも何度かは経験があるのではないか。疎外感の寂しさ、というよりは、小集団を外部から客観的に観察しているような醒めた気分、みたいなもので、かといって優越感に居る訳でも無く、部外者を気取ることもないが、妙に自分の軸足が別の存在であることを自覚する空間だ。

今は限りと思ひしほどは(死んでしまおうと思った時は)、恋しき人多かりしかど(恋しく思った人が多く居たが)、こと人びとはさしも思ひ出でられず(今となっては、他人の男たちは特に思い出されず)、ただ、

「親いかに惑ひたまひけむ(母がどんなに嘆き悲しんでいらっしゃるだろう)。乳母、よろづに(乳母が何かにつけて)、いかで人なみなみになさむと思ひ焦られしを(何とか私に人並みの結婚生活をさせようと苦心していたのを)、いかにあへなき心地しけむ(どんなにがっかりしたことだろう)。いづくにあらむ(乳母は今、何処に居るのだろう)。我、世にあるものとはいかでか知らむ(私が生きているとは思うまい)」

同じ心なる人もなかりしままに(姉妹兄弟に仲の良い者は居なかったが)、よろづ隔つることなく語らひ見馴れたりし*右近なども(幼い時から親しくして見慣れた右近は)、折々は思ひ出でらる(時々思い出されます)。　*右近は乳母子(浮舟巻六章)とあった。

［第八段　浮舟の日常生活］

若き人の(若い女房が)、かかる山里に(こうした山里に)、今はと思ひ絶え籠もるは(出家して籠もり住むのは)、難きわざなりければ(難しいことなので)、ただいたく年経にける尼、七、八人ぞ(もっぱらとても高齢の尼女房の七、八人が)、常の人にてはありける(普段妹尼に仕えている人たちでした)。それらが娘孫やうの者ども(その老尼の娘や孫という者が)、京に宮仕へするも(京で宮仕えしていたり)、*異ざまにてあるも(結婚していたりしていて)、時々ぞ来通ひける(時々御世話しに通って来ます)。　*「ことざま」は注に＜女房生活以外、すなわち結婚生活など。＞とある。

「かやうの人につけて(そのような京都人の場合)、見しわたりに行き通ひ(以前の私の関係先に出入りして)、おのづから(自然に)、世にありけりと*誰れにも誰れにも聞かれたてまつらむこと(私が此処に生きていると宮様や大将殿に知られ申すのは)、いみじく恥づかしかるべし(非常に不都合な事だ)」　＊「たれにもたれにも」は「聞かれたてまつらむ」と敬語遣いなので＜匂宮と薫大将＞のことらしい。

いかなるさまにて*さすらへけむなど思ひやり(そうなれば、何処をどうして放浪していたのだろうなどと誰もが私を堕落して卑しい女になったと想像して)、*世づかずあやしかるべきを思へば(世間に顔向け出来ず惨めになると常陸姫は思うので)、かかる人びとに(そういう京女たちには)、かけても見えず(決して会いません)。　＊「さすらふ」に＜身を持ち崩す＞という語意があるものと解して置く。「思ひやり」の主語は世間の人々なのだろう。　＊「世付く」は＜世慣れる。世俗に染まる。＞と古語辞典にあるが、此処では＜世間に通用する＝顔向け出来る＞と解して置く。

ただ*侍従(ただ侍従という女房と)、こもきとて(コモキという童女の)、尼君のわが人にしたりける二人をのみぞ(妹尼君が召し使っている二人だけを)、この御方に言ひ分けたりける(この姫の御世話係に言い付けていました)。みめも心ざまも(この二人は見た目も作法も)、昔見し*都鳥に似たるはなし(昔見知った都会人のように洗練されていません)。何事につけても(しかし何れにしても)、「*世の中にあらぬ所はこれにや(身を隠すには此処は都合が良い)」とぞ、かつは思ひなされける(と一方では思われます)。　＊「じじゅうこもき」は注に＜侍従は女房、こもきは女童。＞とある。　＊「みやこどり」は注に＜『異本紫明抄』は「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人ありやなしやと」(古今集羇旅、四一一、在原業平)を指摘。都の女房と比較。＞とある。旅行気分、本拠地は此処じゃない、という思いが常陸姫にはあるのだろうか。　＊「世の中にあらぬ所はこれにや」は注に＜浮舟の心中の思い。『花鳥余情』は「世の中にあらぬところも得てしがな年ふりにたるかたち隠さむ」(拾遺集雑上、五〇六、読人しらず)を指摘。＞とある。「世の中にあらぬ所」は＜実際の別の住処＞だろうか。

かくのみ(姫はこうして)、人に知られじと忍びたまへば(人に知られまいと隠れていらっしゃるので)、「まことにわづらはしかるべきゆゑある人にもものしたまふらむ(本当に面倒な事情があって身を隠していらっしゃるのだろう)」とて(と尼君も思って)、詳しきこと(姫の詳しい近況は)、ある人びとにも知らせず(尼庵にいる尼女房たちにも知らせません)。